

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：32614

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05568・19K20778

研究課題名（和文）ディグナーガ論理学における伝統と革新 『集量論』の他学派批判を中心に

研究課題名（英文）Tradition and innovation in Dignaga's system of logic: his criticism of other schools

研究代表者

渡辺 俊和 (Watanabe, Toshikazu)

國學院大學・文学部・准教授

研究者番号：20822159

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、『因明正理門論』と『集量論』というディグナーガ（5世紀）の著作、そしてジネンドラブッディの『集量論注』を読解することにより、ディグナーガの論証論の成立背景と展開について以下の点を明らかにした。（1）ディグナーガの論証論はバルトリハリにおける語用論的視点やサンキヤ学説に由来すると考えられる理論（証因の三条件説や帰謬法）から影響を受けているという点、（2）三条件説を導入したのちも討論術的要素を色濃く残すディグナーガの体系は、文軌などの玄奘門下にも『集量論』の伝統とともに引き継がれているという点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

証因の三条件説をディグナーガが自らの体系に取り入れることにより、討論術的伝統から認識論的な伝統へと仏教論理学は展開していったと従来理解されていた。これに対して本研究の成果が明らかにしたのは、彼の最終的見解が示されている『集量論』でもディグナーガは、かなりの程度討論術的伝統を維持しているということである。そしてその原因として、彼がナーガールジュナをはじめとする大乘の空思想とのつながりを強く意識していたことが想像される。

玄奘および彼の弟子たちの間で『集量論』の内容の一部が伝承されていたことが近年指摘されつつあったが、本研究ではさらにそれが広範囲なものであることを指摘している。

研究成果の概要（英文）：By using Dignaga's (ca. 6C) two works on logic, i.e., Nyayamukha and Pramanasamuccaya, and Jinendrabuddhi's commentary on the latter, this study clarifies following two points on the background and development of Dignaga's theory of proof: (1) Dignaga's theory of proof is influenced by Bhartrhari's (ca. 6C) pragmatism point of view on the sentence and by theories that are attributed to the Sankhya school (e.g. the theory of the three characteristics of a proper logical reason or the theory of prasanga); and (2) Dignaga's theory of proof, which still retains the elements of the tradition of disputation even after his introducing the theory of three characteristics of a proper logical reason, is continued by some disciples of Xuanzang along with the transmission of theories of the Pramanasamuccaya.

研究分野：インド論理学・仏教哲学

キーワード：ディグナーガ ジネンドラブッディ 集量論 集量論注 玄奘 因明正理門論 パラドックス 仏教論理学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

6世紀インドの仏教哲学者ディグナーガは、討論術的伝統と認識論的伝統とを統合し、インド論理学にパラダイムシフトをもたらした。これまでの研究では、ディグナーガのインド論理学史における功績は、推理・論証に妥当性を持たせるための根拠を証因の三条件 (trirūpa) として規定し、論証の支分をそれまで一般的であったニヤーヤ学派の見解である5つから簡素化し、3つへと変更した点にあると考えられている。しかしながらこのような変更は、たとえディグナーガが証因の三条件をより厳密なものとするために遍充関係 (vyāpti) の理論をそこに導入したという違いはあるにしても、既にヴァスバンドゥ(あるいは彼に非常に近い立場の仏教徒)によって採用されていたものである。ではディグナーガの革新性とは、単に既存の理論に変更を加えて論証形式を整備したという点のみにあったのだろうか。彼が初期の著作『因輪論』(Hetucakrad amarū)で正しい証因のチェックリストを作成していたこと、そして彼の論理学が存在論を可能な限り排除した開かれた論理学を目指していたであろうことを考慮に入れると、彼による論証形式の再規定は、形式的な整備のみを目的としていたのではなく、推論式の論理的検証を容易にすることが最大の目的だったと考えられる。このように仮定することで、彼の論理学が諸学派間に共通する対話のツールとして受容された事実をより整合的に説明することができる。

また、先行研究も明らかにしているように、ディグナーガはヴァスバンドゥから多大な影響を受けている。しかしながら、ヴァスバンドゥもその影響下にあった大乘仏教の巨人、ナーガールジュナからの影響については、これまでのところ否定的な見解が提示されている。

従来のディグナーガ研究は、彼の主著『集量論』(Pramāṇ asamuccaya)を中心としつつも、その原典は現存せず、二種の不十分なチベット語訳と若干のサンスクリット語断片に基づくものであった。しかし、散失したと考えられていたジネンドラブッディ(8世紀頃)による『集量論』に対する注釈『集量論注』(Pramāṇ asamuccayaṭīkā)のサンスクリット語写本の存在が1990年代に明らかとなり、2000年代初頭から『集量論注』の研究がオーストリア科学アカデミーと中国政府とが協力する形で開始されたことで、『集量論』についてもこれまで以上に正確な理解が可能となりつつある。

2. 研究の目的

このような状況下で、長期的にはインド論理学史、およびインドから東アジアにかけての仏教史におけるディグナーガの位置付けの解明をも視野に入れ、本研究は

1. ディグナーガ論理学には、ヴァスバンドゥなどだけではなく、ナーガールジュナ、あるいは彼の系譜からの影響も見られるかどうか
2. ディグナーガが推論形式を新たに規定した目的は、推論の論理的な検証を容易にするために推論式を再規定した点にあったのではないか

という以上の二つの点についての検証を目的として設定した。

3. 研究の方法

本研究では、以下の五つの項目からなる文献学的研究を行うことにより、目的の達成を目指した。

1. 『集量論』第3-4、6章の現代語訳
2. 『集量論』第3-4、6章のサンスクリット語復元テキストの作成
3. 『集量論注』第3-4、6章の校訂テキスト出版準備
4. 『集量論』および『集量論注』による他学派の論理学説の復元
5. 論駁の手法に関しての『集量論』と『廻諍論』・『方便心論』との比較

このうちの1と2については、『集量論注』第3-4章校訂作業のリーダーである桂紹隆博士(龍谷大学世界仏教文化研究センター)と、そして同じく第6章校訂作業のリーダーである小野基教授(筑波大学)と共同して行った。また4については、ニヤーヤ学派の専門家である室屋安孝博士(オーストリア科学アカデミー アジア文化・思想史研究所)に協力を仰いだ。3と5については、渡辺が個別で遂行した。

4. 研究成果

本研究の主な成果を(1)から(3)にまとめ、各項目について以下に説明する。

(1) 『集量論注』第4、6章のサンスクリット語校訂テキストおよび現代語訳の作成

小野基教授、室屋安孝博士と研究会を開催し(2019年3月、2020年3月。於筑波大学)第4および第6章についてデーヴァナーガリー文字による組み版を作成した。現在もそれに基づいて『集量論』のサンスクリット語テキストの再構成、そしてそれを用いてさらに『集量論注』を見直すという、校訂テキスト出版に向けての最終作業を進行中である。

第4章では従来はディグナーガ説と思われていた箇所が、対論者の見解として批判されることが明らかになったが、当該箇所のテキストに竄入の可能性があるため、さらなる検討が必要である。

第3章については、後述する(3)の点について、玄奘門下の解釈との関連性が明らかになったため、ディグナーガの自説を扱った前半部の見直しにとどまった。また第6章でも、誤謬論の

中心的概念の一つである「欠減」(nyūna) について、玄奘の『因明入正理論』の翻訳と現存サンスクリット語テキストの違い、そして玄奘訳が玄奘門下の解釈に与えた影響が明らかとなったため、『集量論注』第3章とともに検討を加えた。その成果は“On the concept of *nyūna* in Dignāga's theory of fallacy” (in: *Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia*, ed. S. Moriyama.) として近日中に公刊される予定である。

(2) ディグナーガによる論理学体系の成立における、文法学派説およびサーンキヤ学派説の影響の指摘

いわゆる「エピメニデスのパラドックス」と言われる言明をめぐるディグナーガの見解を文法学者バルトリハリによるものと比較し、両者が語用論的な視点を共有しながらもディグナーガは当該の言明を「誤った主張」に分類していることを明らかにした。ディグナーガは当該の言明を『因明正理門論』(Nyāyamukha)と『集量論』とで扱っているが、「誤った主張」に分類されるメカニズムについては後者でのみ詳論されている。おそらくはこのような事情から、8世紀の仏教徒プラジュニャーカラグプタは、「発話者は発話をする時点ではそれを真なる(プラマーナ)言明として認めている」というダルマキールティの *Pramāṇavārttika* 4.94 での発言に基づいて、『因明正理門論』でのディグナーガの意図がどのようなものであったのかについて説明を施している。

また、ディグナーガの論理学体系の中核をなす「証因の三条件」と同様、彼の誤謬論において重要な概念となる「欠減」(nyūna) についても、『順中論』中の対論者であるサーンキヤ学派説からディグナーガはおそらく影響を受けていると考えられる。そしてこれは、ディグナーガが「帰謬」(prasaṅga) についてもサーンキヤ学説を出発点としていることと合わせ、ディグナーガの論理学体系におけるサーンキヤ学説の影響力の大きさを物語るものである。またこの「欠減」は、『集量論』においても「証因の三条件」の「言明」(ukti) に関わるものであり、このことは、ディグナーガの段階においてもインドの論理学には討論術的な要素が保持されていたことを示している。

(3) 玄奘門下における『集量論』説の影響の指摘

玄奘門下の神泰および〔窺〕基による「欠減」を見ると、『因明正理門論』ではなく、ディグナーガが『集量論』で新たに「証因の三条件」と関連させた定義が採用されていることが明らかとなった。また、「エピメニデスのパラドックス」と同種の言明に対しての文軌および神泰の説明にも、それが『因明正理門論』あるいは『因明入正理論』に対しての注釈であるにもかかわらず、『集量論』でしか用いられていない、インドの文法学派由来の語用論的視点が用いられている。これらの事例から、従来考えられていた以上に、玄奘門下には『集量論』でのディグナーガ説が、おそらくは玄奘によって、伝えられていたことが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡辺俊和	4. 巻 121
2. 論文標題 玄奘門下へのディグナーガ論理学の伝播について：「エビメニデスのパラドックス」の事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺俊和	4. 巻 1
2. 論文標題 “sarvam mithya bravimi” および発話の条件について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ブラジュニャーカラグプタ研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toshikazu Watanabe	4. 巻 -
2. 論文標題 On the concept of nyuna in Dignaga's theory of fallacy	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Toshikazu Watanabe
2. 発表標題 Dignaga on fallacies of the thesis
3. 学会等名 Philology, Philosophy and the History of Buddhism: 60 Years of Austrian-Japanese Cooperation
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----